

## 般若寺の弓箭及箆について —「大安寺宝物」と正倉院宝物—

当館学芸部研究員 伊藤 旭人

令和四年(二〇二二)四月二十三日、特別展「大安寺のすべて—天平のみほとけと祈り—」が開幕を迎える。本展に出品されている弓箭及箆(奈良・般若寺蔵、図1)は、奈良時代(八世紀)に制作された弓箭・箆の遺品である。かつては大安寺の所蔵であったが、江戸時代中期に般若寺へ移されて現在に至る。「重宝一モノコラス焼失」といわれる至徳二年(一三八五)の大安寺火災を奇跡的に免れた品であることが記録により判明している。

本品は古くから「神功皇后三韓退治ノ時御所用」の伝承をともなう弓箭具として知られており、江戸時代には儒学者新井白石が上代の弓箭具のひとつに本品を取り上げ、さまざまな記録を遺している(新井白石著「本朝軍器考」巻四、宝永六年)。次に述べるように、いずれ

も古様な特徴を示し、その作域からは当代の優れた工芸技術を見ることができ

る。弓は、木材の単材を削って作られている。このような弓は丸木弓と呼ばれ、奈良時代以前の弓に見られる特徴である。今日の弓道で使用されるような弓には、耐久性や弾力性を持たせるために竹材が含まれてい



図1 弓箭及箆



図2 箆部分

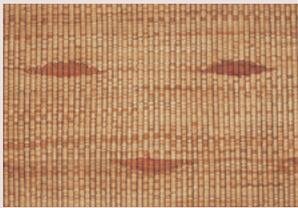


図3 御書箱(正倉院宝物 北倉3)部分

る。しかし、本品は一木彫成であることよって引き代が小さくなるため、弓を引くには相当の力が必要であったはずである。表面は現状素地を呈しているが、制作当初は黒漆塗であったと考えられる。

六本セットの箆は、矢羽を亡失するものの、鉄製の鏃は完存する。鏃の形状はそれぞれ異なり、剣先形や台形、鉛形、さらにはイカのような形を成すものなどがある。このような鏃の起源は諸説あるが、朝鮮半島三国時代(四〜六世紀)の古墳からは近似する鏃の出土例があり、大陸に起源をもつ可能性も考えられる。日本国内でも近似品の出土例はあるが、伝世品では正倉院宝物や法隆寺献納宝物の箆の鏃が知られている程度であり、大変貴重である。

これらの箆を入れて背負うための用具である箆は、植物の茎の表皮を取り去った細木を芯とし、蔓を編み込んで作られている。背板に取り付けられた方立(箆を収めるポケット)には、染料で染めた蔓を用いて小菱文を編み出す(図2)。この文様を見て、筆者の頭の中に、ふとある作品が思い浮かんだ。それは、正倉院宝物「御書箱(北倉三)である。御書箱とは、聖武天皇自筆の雑集や光明皇后自筆の杜家立成(いずれも北倉三)などを納めていた由緒ある品。本品と同じく、植物の蔓を用いて作られた被蓋造の箱である。この二つの作品にあらわされた小菱文に着目すると、大きさに若干違いがあるものの、菱形の輪郭線の編み出し方は全く同一の手法である(図3)。御書箱は、植物材質調査によって用いられた植物が判明しているが、本品については近年の調査実績がなく、現在諸説が提示されるまでに留まっている。今後、本品の植物材質調査の実施が叶えば、御書箱との近似性を検討するうえで重要な結果を得られることだろう。

以上のように、本品は弓箭・箆のいずれも古様な弓箭具の特徴をもち、なかでも箆と箆には正倉院宝物との近似が認められる。同時期の作例が少ない当代において、その存在意義は計り知れない。まさに「大安寺宝物」と呼ぶに相応しい作品である。長きにわたって大安寺を護り、そして人々に守られてきた本品に思いを馳せながら、奈良時代の工芸技術の一端に触れていただければ幸いである。

### 主要参考文献

- 酒井元樹「般若寺と春日大社の弓矢」『MUSEUM』六一九、二〇〇九年
- 木村法光「年次報告植物材質調査」『正倉院紀要』六、一九八四年、宮内庁正倉院事務所
- 東京国立博物館編「伽耶文化展」一九九二年、朝日新聞社
- 奈良国立博物館編「第七十三回 正倉院展目録」二〇二二年、奈良国立博物館